HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウズベキスタンのマハッラ : 社会自治組織としての発展の歴史
Author(s)	ウマロヴァ, グルバホル; Umarova, Gulbahor Berdiyevna; 樋渡, 雅人
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 4, 147-155
Issue Date	2015-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58408
Type	departmental bulletin paper
File Information	25147Umarova.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第４号
北海道大学　2015．3

＜研究ノート＞

ウズベキスタンのマハッラ
－社会自治組織としての発展の歴史－

ウマロヴァ・グルバホル，補訳・解説：樋渡　雅人

【要　約】「マハッラ」とは，現在のウズベキスタン共和国において，末端の行政単位として機能している地域共同体である。自治的な共同体としての歴史は古く，そこには昔ながらの親密な人々のつながりが根付いてきた。独立後の同国政府は，マハッラの人的ネットワークを，開発政策，政治活動，治安等の様々な局面において，政策的に利用する方針を打ち出してきた。マハッラは，ウズベキスタンの将来において，自律的な地域経済や地方分権の発展の礎を担い得る存在として期待されているといえる。本稿は，この「マハッラ」が自治的共同体として発展し，独立後に政策的に活用されるに至った歴史的経緯を，歴史文献に依拠しながら振り返ることで，ウズベク民族にとっての「マハッラ」の社会的意義を論じている。
【キーワード】地域共同体，開発政策，ウズベキスタン，歴史

はじめに

「マハッラ」とは，現在のウズベキスタン共和国において，行政の末端単位として機能している地域共同体である。自治的な共同体としての歴史は古く，そこには昔ながらの親密な人々のつながりが根付いてきた。独立後の同国政府は，マハッラの人的ネットワークを，社会保障，文化活動，教育，政治活動，ビジネス，警備等の様々な局面において，政策的に利用する方針を打ち出してきた。マハッラは，ウズベキスタンの将来において，自律的な地域経済や地方分権の発展の礎を担い得る存在として期待されている。自律分散型ネットワークの視点を提示し，学問と実践の橋渡しを掲げる本センターの趣旨からも，興味深い研究対象といえるだろう。

今回，ウズベキスタン国立世界言語大学社会科学学部の教授であるウマロヴァ・グルバホル氏より，ウズベキスタンのマハッラの歴史に関する論考をご寄稿いただいた。ウマロヴァ氏は，1991年にブハラ国立大学を卒業後，ブハラ工科大学歴史学部や大統領国家行政アカデミーで教育や研究に従事し（その間に博士号を修得），2006年以降は現在の大学に勤務している。ウズベキスタンのマハッラを主要な研究対象としており，その法的基盤，人的資源，民主化，分権化，社会保護，教育面での役割，ブハッラのマハッラの歴史等に関して，凡そ30本の論考をウズベキスタンやトルコの学術的な雑誌において発表してきた。今回ご寄稿いただいた論考は，同国の歴史学の分野で，社会自治組織としてのマハッラの発展の歴史がどのように捉えられているのかを紹介したものである。マハッラが，現在までに，国民のアイデンティティに深く関わる，社会的，政治的に重要な組織として発展するに至った背景を，歴史的経緯の叙述によって示そうとしている。以下では，ウマロヴァ氏の論考の邦語訳を紹介し，そのうえで，社会的，学術的背景に関わる若干の解説を加えたい（樋渡）。

次頁邦語訳

1. 序

マハッラは，国民の歴史的な慣習や精神性に基づき形成されてきた。自治のために不可欠な社会組織として，マハッラは常に重要な存在であった。それは，人々の間で良き隣人関係や尊敬の念，人間性を高めるうえで，大きな役割を果たしてきた。また，市民の社会的利益を保護してきた[1)]。

2. 古代

マハッラは長い歴史を有するが，その起源を辿れば，青銅器時代まで遡ることができる。当時の人々の生活には，大きな社会的，経済的な変化がもたらされていた。例えば，生産業の分業・特化が始まる。この過程において，生産力は上昇し，共同作業によって物理的財を生産する基盤が形成された。これを契機に人口密度の高低が生じる。この時期に，家父長主義に基づく家族，または近親者で構成される大家族や隣人関係で団結した集団が，社会の新たな地縁集団として出現した。

ゾロアスター教のアヴェスタ教典において，このような集団についての最も古い記述が見られる。アヴェスタ教典には，拡大家族の共同体として「ヌマナ (nmana)」，氏族の共同体として「ヴィス (vis)」，部族の共同体として「ザントゥ (zantu)」について記述されている。また，「パティ（pati)」はこれらの共同体を率いる長を意味し，「ヌマナパティ（nmanapati)」は大家族長，「ヴィスパティ（vispati)」は氏族の長，「ザントゥパティ（zantupati)」は部族の長を意味していた[2)]。

青銅器時代の古代遺跡の１つであるソポリテパ（Sopollitepa）において発見された史料によると，そこには大きな社会集団が８つ存在したようである。それぞれの集団には，百戸以上の家父長主義の家族が団結しており，各団体の管理は人々に選ばれた団長に任されていた。団長は，集団の内部で起こった問題を団長会議により解決していた。こうした事実を証明する史料は「クチュクテパ（Kuchuktepa)」，「キゼィルテパ（Qiziltepa)」という遺跡でも発見されている。

紀元前３世紀に形成された「漢」や「大苑」という国家においても，重要な事項は全て団長会議において決められていた。それらの事項には，社会事業の実施，納税，宣戦布告や講和締結等が含まれる[3)]。「クシャーナ朝」の時代には，それぞれの地域ごとに職業別集団が形成された。「ダルヴァルゼィンテパ（Dalvarzintepa)」や「カムピルテパ（Kampirtepa)」の遺跡からの史料によると，都の中心部は貴族の，都の南部は職人の居住地域だったという。

人類の集団生活の起源について研究していたアブー・ライホン・ベルニ（Abu Rayhon Beruniy）は「人間の持つ無制限の欲求，貯蓄や資源分配における非効率性，自己防衛のための手段不足，敵対勢力の存在が故に，人間は，互いの安全を保証し，自分や仲間の自給自足を達成するという任務を全うするために，家族や親族の共同体に属さなければならなかった」と結論付けている[4)]。アブー・ナスル・ファロビ（Abu Nasr Forobiy）は「人は，その本性から，生存し最高の自己達成を実現するために，多くの物を必要とするように造られた。人は，そうした物を一人で手に入れることはできず，集団を形成する必要が生まれた。つまり，人は，生活に不可欠な相互扶助をお互いに行うことを通してのみ，本性に導かれた最高の自己達成を実現できる。そうした社会の構成員の活動全体が，生活や自己達成のために重要なものを個々人にもたらす。したがって，人々は，生活に適した場所において再生産や定住するようになり，結果として集団が出現した。」と述べている[5)]。

1）Каримов И. Ўзбекистон XXI аср бўсағасида. Хавфсизликка таҳдид, баркарорлик шартлари ва тараккиёт кафолатлари. Тошкент, 1997. 156-бет.

2）Сагдуллаев А., Мавлонов Ў. Ўзбекистонда давлат бошкаруви тарихи. Тошкент. 2006. 17-бет.

3）同上，51 - 52-бетлар.

4）Беруний Абу Райҳон. Танланган асарлар. Геодезия. III том. Тошкент. 1966.83-бет.

5）Форобий Абу Наср. Фозил одамлар шахри. Тошкент. 1993. 186-бет.

3. 中世

家父長主義を基盤とする近隣関係は，中世においては，マハッラ内において根付くことになる。マハッラは，住民達による最初の自治的な管理組織となった。

中世における歴史文献においても，マハッラが長い歴史を持つことが強調されてきた。「マハッラ（mahalla）」という用語自体が初めて用いられるのは，10 世紀の歴史学者アブー・バクル・ムハンマド・イブン・ジャハル・ナルシャヒ（Abu Bakr Muhammad ibn Jafar Narshaxiy）の『ブハラ史』という著作においてである [6]。この用語は，中央アジアには，アラビア語起源の単語として入ってきた。特に，タシケントやコーカンド・ハン国の領域において広く用いられていた。 ブラハにおいては，マハッラに対して，3 つの単語，すなわち「マハッラ」（アラビア語），「ク」と「グザル」（ペルシア語）が用いられていた。中世初頭から 16 世紀までは，「ク」，その後 20 世紀までは「グザル」と言う単語が使用された [7]。ナルシャヒの『ブハラ史』においては，1100 年前のブハラには，「KuyiAlo」「KuyiBekor」「KuyiRindon」「Samarqanddarvoza」「Fag'sodara」「Darvoza」「KardunKashon」「DarvozaiMansur」「KuyiDehqon」「KuyiMug'on」「KuyiKoh」というマハッラがあった記述されている。

バイハキ（Bayhaqiy）の『タリヒマスディヤ（Tariximasudiya）』と言う著作では，マハッラの活動として，様々な催しの実施，町の設備改革，軍事活動，スポーツ大会の実施があったこと等について記されている [8]。

アミール・ティムル（Amir Temur）の『法典』では，集団生活やその管理体制について，以下のような記述がある。「戦争時や，統治国家では，百人隊長は千人隊長に，十人隊長は百人隊長に，他の人は十人隊長に従うべきだ。これに従わないものは罰せられる。」

アリシェル・ナボイ（Alisher Navoiy）は，マハッラの重要性に関して，彼自身の政治・哲学的な見解を表明している。彼の『善人たちの感嘆(Hayrat ul abror)』という作品において，マハッラの素晴らしい定義として，「マハッラは街の小町である」と記し，以下のように述べた。「町にマハッラの名を与えよう。それらが 100 集まれば，ヘラートにもなる。」[9] さらに，『ワクフィヤ（Vaqfiya）』という作品においては，ナボイが居住していたマハッラにおいて実施された福祉事業，例えば，マドラサ，マクタブ，庭の建設について見ることができる。

フサイン・ヴォイズ・コシフィ（Husayn Voiz Koshifiy）の『スルタンの勇気のノーマ』という作品においては，マハッラにおいて，従うべきとされる道徳や隣人との関係における良い規範などについて記されている [10]。

4. ハン国時代

中央アジアに 3 つのハン国（コーカンド・ハン国，ヒヴァ・ハン国，ブハラ・アミール国）が成立していた時代におけるマハッラの社会的な役割に関しては，数々の文献において記されている。それら文献には，スハレヴァ（O.A.Suxareva）の『封建時代末期のブハラの街区共同体』『ブハラ・ハン史』，マリツキ（N.G.Mallitsiy）の『タシケントのマハッラと郊外』，アザダエヴァ（F.Azadaeba）の『19 世紀後半のタシケント』，レムペル（Rempel）の『遠くと近く』等が含まれる。

アザダエヴァの『19 世紀後半のタシケント』においては，タシケントが 4 つの区画から成立していたことが記されている。また，各区画にはそれぞれ独立した知事がいた。18 世紀のタシケントは，「4 区画体制」と呼ばれていた [11]。各区画

6）Наршахий Абу Бакр Муҳаммад ибн Жаъфар. Бухоро тарихи. Тошкент. 1993. 116.119-бетлар.
7）Сухарева О. А. Квартальная община позднефеодального города Бухары. М.. 1976. С. 115-116.
8）Бейхаки. История Масуда. Ташкент, 1962. С. 74.
9）Алишер Навоий. Ҳайратул-аброр. Тошкент, 1991. 309-бет.
10）Хусайн Воиз Кошифий. Футувватномаи султоний. Тошкент, 1994. 54, 66-бетлар.
11）Азадаев Ф. Ташкент во второй половине XIX

はそれぞれに独自のマハッラを持ち，それぞれのマハッラには，独自のオクサカル（指導者，長老）と複数の補佐役がいた。マハッラのオクサカル，10 人長，50 人長，100 人長，税務役人 (amin) は，権限を与えられ，市民は，彼らの出した指令を法令として受け止めていた。スハレヴァの『封建時代末期のブハラの街区共同体』においては，19 世紀末期のブハラは，12 地区に分かれ，200 以上のマハッラから成り立っていたことが記されている。

レムペルは，当時，ブハラの各マハッラが独自に擁していた夜警（自警団）について記している[12]。この夜警は，夜 8 時から朝 6 時まで，市民の社会的規範の遵守を監視し，安全を確保する任務を担っていた。

マハッラは，居住者の職業，気候や地理的特徴を基にそれぞれ名前が付けられていた。20 世紀初頭，タシケントには 250 以上，ブハラには 200 以上，サマルカンドには 100 程度，シャフリサブスには 52 程度，キトブには 42 のマハッラが存在した[13]。

マハッラのオクサカルと補佐役は，住民達によって選ばれた。マハッラのオクサカルはホキミヤット（ここでは都市レベルの行政府を意味する）に対する公式な代表となったが，その地位についてはホキミヤットの承認が必要であった。選挙の後，その指名はホキミヤットの指令書によって承認された。オクサカルは，シャリーアに従って，遺産としての土地や家屋の分与を行う仕事もしていた。また，マハッラにおける不動産の売買の業務に関与することができた。オクサカルはまた，マハッラ内の居住者の間の紛争を仲裁することで，紛争を裁判官（カーディー）に持ち込まないようにしていた。居住者の不正がホキミヤットに検挙された際には，オクサカルがその者の保護者とならなければならなかった。オクサカルはまた，マハッラ内の清掃を監督した。様々な祝祭儀礼においては，オクサカルトや補佐役の役割は特に際立って感じられた。オクサカルは，祝祭儀礼の設立に関する業務に対する主要な助言者となり，設立チームの全ての仕事を監督していた。マハッラのオクサカルやその他の指導的人物達の決定と見解は，会議において，決定的な重要性を持っていた。マハッラの人々の社会的出自は同一ではなかった。しかし，異なる出自であっても，社会的活動や個人的な関係性を通して，マハッラの作業チームに統合されていった。

周知の通り，当時は，現在のような法制度は存在しなかった。しかし，時代の性格に応じて適用された権利や指令は，法律に等しい地位があった。このことは，現代科学的な用語を用いれば，民主主義的な要素ともいえる。

5. ソ連時代

マハッラは，ソ連時代まで，住民をまとめあげ，社会的活動を組織することで，広汎な役割を果たしていたが，ソ連時代には，マハッラの活動には圧力を与える政策が採られた。ソ連時代初期には，市ソヴェトによるマハッラの活動の監視が強化された。マハッラのオクサカルの出自の調査がなされ，宗教関係者や商人は有害とみなされた[14]。

ソヴィエト体制を強化するために，古い社会的組織であるチョイホナ（茶屋）が利用された。チョイホナは，政治的なプロガンダの中心として用いられた。1927 年に「赤いチョイホナに関する」法令が出されたが[15]，チョイホナは，スローガンによる主張，視覚的な宣伝，集会や祝祭でのプロパガンダを通して，人々に影響を与えやすい場であったため，そこでは共産主義のイデオロギーが精力的に宣伝されていた[16]。

ソ連時代には，マハッラの活動に関する幾多の法令が出された。1926 年のウズベク・ソヴィエト共和国中央執行委員会による「ウズベク・ソヴィエト共和国旧市街でのマハッラ委員会の活

века. Ташкент, 1959. С. 46.

12）Ремпель Л.И. Далекое и близкое. Ташкент, 1981. С. 47.

13）Сухарева О.А. Квартальная община позднефеодального города Бухары. С. 46 - 47.

14）Волков Б. Нужны ли махаллинские комиссии // Правда Востока. 1927. 9 окт.

15）ЦТ А УзССР. ф. Р-86. оп. 1, д. 4106. л. 37.

16）Волков Б. Нужны ли махаллинские комиссии.

動について」，1932 年 4 月 17 日のウズベク・ソヴィエト共和国中央執行委員会の第 42 決議による「ウズベク・ソヴィエト共和国の市街地におけるマハッラ委員会について」，1941 年 1 月 19 日のウズベク・ソヴィエト共和国人民委員会議による「ウズベク・ソヴィエト共和国の市街地におけるマハッラの委員会について」，1953 年 4 月 3 日のウズベク・ソヴィエト共和国閣僚会議による第 462 決議「ウズベク・ソヴィエト共和国の市街地におけるマハッラの委員会について」，1961 年 8 月 30 日のウズベク・ソヴィエト共和国最高会議幹部会，第 25 決議「ウズベク・ソヴィエト共和国の市街地，町，農村，遊牧民族用の村におけるマハッラの委員会について」等が挙げられる。さらに，1983 年 7 月 4 日には，ウズベク・ソヴィエト共和国最高会議幹部会の第 3460 決議「ウズベク・ソヴィエト共和国の市街地，町，農村，遊牧民族用の村におけるマハッラの委員会について」が出された。

上記の諸決議からは，当時のマハッラの権利や権限は非常に限られていたことが伺える。例えば，マハッラ委員会は，住民を代表する組織でありながら，罰則の実施，罰金の徴収，指令書の発行等の権利を有しなかった。マハッラ委員会は，いかなるフォーマルな法的地位も有しなかった。マハッラ委員会は経済活動を行うことができず，食堂，赤チャイハナ，床屋の経営等を設立したり，利用したり，売買や賃貸したりはできなかった。

当時のマハッラの権限は，居住登録，寡婦や子沢山な母親への補助金申請に必要な証明者を与えること，住民の出入りの記録することに限られていた。

また，マハッラ委員長はいかなる権力や権限も有していなかった。マハッラはその地域で起こった社会，経済，教育の問題の解決において，独自の決定権を持たなかった。

ソ連時代に，共産党は，地元の下部組織を支援し，独裁的なシステムのイデオロギーを市民に浸透させるためにマハッラを利用していた。しかしながら，マハッラの活動に対する圧力や障害にもかかわらず，ウズベク民族のマハッラという自治的な組織は，独自の存在意義を失わずに維持した。

6. ソ連末期

ソ連時代，マハッラの権利や権限が制限されたことで，マハッラの直面する問題は長年に渡って蓄積されてきた。80 年代末期になって初めて，ウズベキスタンのマハッラの活動にポジティブな変化が起こり始める。そうした変化のプロセスは，特にタシケントにおいて広がり始めた。共和国のメディアにおいては，マハッラの社会的重要性や権限，その他の問題に関する議論が盛り上がった[17]。

1989 年 7 月から，マハッラの活動家達のイニシアティブによる「マハッラの住民」という小新聞が，「タシケント・イブニング」という新聞の付録として刊行されるようになった。そこで，「私達の都市の繁栄：問題と解決」といったテーマの下，マハッラの功績や欠点あるいは山積する課題についてオープンに議論されるようになった。例えば，「マハッラは，我々民族の慣習と伝統を先祖から子孫に受け渡す不思議な木箱である。しかし，マハッラは悩みが多い。」といった記述があった[18]。

マハッラには，幼稚園，学校，医療施設が不足しており，ガス，電気，電話，道路，交通，灌漑施設，遊戯場，通信，スポーツ，子供の公園の状態は劣悪であった。当時，タシケント市のマハッラ地区の水道の普及率は 46％，下水道は 38％，ガスは 80％であり，就学前施設の普及率は 76％であった。マハッラの事務所（グザル）の再建，チョイハナを伝統的な行事や政治的な学習のセンターに変えるというような課題があった。

マハッラの直面する数々の問題を解決し，市民の生活保障を根本的に改善する目的で，1989 年にタシケント市最高議会の第 12 会期では「マハッ

17）Темуров Ш. Турмуш тақозоси. // Тошкент оқшоми. 1990 йил 30 июл; Фозилхужаев К. Тошкентликларнинг айни муддаоси. // Махалладош. 1989 йил октябр, №8.

18）Фозилхужаев К. Тошкентликларнинг айни муддаоси. // Махалладош. 1989 йил октябр, №8.

ラ」プログラムが採択された。これは，1991 年 6 月 21 日，タシケント市ソヴィエトの人民議員によって，5 年間のプログラムとして第 116/6-21 決議において採択された。このプログラムには，健康，民族的啓蒙，交易，給食，社会的な施設，啓蒙的，文化的な設備増設，諸施設のリノベーション，交通，その他のサービスに関して，抜本的に改善するための任務が含まれていた[19]。この結果，マハッラの問題とニーズに関する注目が高まることになる。「マハッラ」プログラムの実施は，市民の生活保障を改善するための機会を生み出したが，マハッラに全力で活動するための権利を与えるには至らなかった。

マハッラの活動をさらに活性化させるために，1990 年初頭に，タシケント市ソヴィエトのイニシアティブの下，マハッラと地区委員会，市民組織と共同して活動する常時委員会が設立された。委員会の議長には，S. ティムロフ（タシケント市マハッラ業務履行ソヴィエト副長）が選ばれた。委員会の構成員には N. ハサノフ，A. アブドゥマヴロノフ，H. アブドゥラヒモフ，K. コミロフ，T. コシモフ，T. ニヤゾフ，S. パフルッディノフ，M.Z. リャブチュク，F. ホシモフラルらが含まれた[20]。

同委員会は，市民の意見に従い，マハッラとその他の地域の世帯調査を実施すること，「マハッラ」プログラムの実行を監視すること，近代的な生活習慣を身につけさせること等の課題に取り組んだ。さらに，市民の要求の中で重要な課題を，タシケント市ソヴィエト最高会議幹部会に提案し，議論した。

マハッラ委員会の活動をさらに改善する目的で，1990 年 1 月から，マハッラ委員会や地区委員会，市民組織の指導者達に国から給料を支払う特別決議が採択された。当時，共和国には 2,500 のマハッラが存在したが，それらに対して，国の予算から 120 万ルーブルが拠出された[21]。

この決議の採択は，マハッラのオクサカルの社会的地位を向上させ，彼らの任務に対する責任を高めた。同時に，マハッラの権限を拡大するために，彼らの権利を明確化することが課題となった。その課題解決のために，マハッラ関連の法令に関するプロジェクトが，マハッラ，地区委員会及び社会的組織と緊密に共同する常時委員会のメンバー，K. コミロフ教授によって考案され，タシケント市ソヴィエト最高幹部会に提案された。このプロジェクトは，7 月 9 日付けの新聞「タシケント・イブニング」において公表され，市民の議論の対象となった[22]。

1990 年 9 月 7 日，タシケント市ソヴィエトの第 3 会期において，マハッラ，地区委員会，退役軍人（支援者）の委員会が準備した「タシケント市マハッラ委員会について」の綱領が議論された。

この課題の議論に参加した議員は，H.G. コディロヴァ，M.M. ムロドフ，M.Z. リャブチュク，H. ハサノフラルであるが，彼らは，自分達の価値観を回復し，若者たちを教育し，良い隣人関係を作り，人々の助け合いを強めるために，マハッラ委員会が実行する業務に注力するべきであると述べた[23]。

1990 年 10 月 20 日，ウズベキスタンの歴史上初めて，タシケント市の全てのマハッラの大集会（クリルタイ）が開催された[24]。その大集会においては，タシケント市マハッラ委員会の集会に関する報告，マハッラ・プログラムの履行，綱領の草稿，新聞「マハッラの住人」に関する報告などの議題が議論され，綱領が採択された。その綱領の中で重要な課題の 1 つは，マハッラにフォーマルな法的地位を与えることであった。そして，マハッラ委員会の権威を高めること，家族の絆を強めること，若者たちの教育に注力すること，彼らを有用な行為や仕事に引きつけること，単身あるいは経済的困難な家族を援助すること等が綱領に含まれた[25]。

その綱領の最も重要な目的は，民族的な慣習を

19）Махалладош. 1990 йил 20 январ.
20）Тошкент оқшоми. Маҳалладош. 1990 йил апрел. №7.
21）Тошкент оқшоми. Махдлладош. 1989 йил ноябр. №10.
22）Тошкент оқшоми. 1990 йил 9 июл.
23）Тошкент оқшоми. 1990 йил 14 сентябр.
24）Тошкент оқшоми. 1990 йил 14 октябр.
25）Тошкент оқшоми.1990 йил 14 октябр.

回復すること及びマハッラ委員会が直面している問題を解決することであった。そのために，この綱領においては，マハッラ委員会がマハッラにおいて日々直面する数多くの課題を解決するための権限やマハッラ委員会の独立性を拡大することが検討されていた。また，住民による自治的組織としての最初の組織体制が整備され，マハッラ内の各組織と，地方ソヴィエトや幹部機関，その他の組織との関係性が示された。マハッラ委員会がより独立性を獲得するためには，市民の権利や自由を保証し，地域の社会的経済的課題を解決し，これまでホキミヤットの責任であった環境問題を解決するための自由裁量が与えられることが主要な課題として強調された。この結果，マハッラ委員会は「市民自治のための末端機関」として活動を始めた。

綱領によって，マハッラの経済的，組織的問題の骨子が定められた。しかし，マハッラ委員会の議長や書記の権利や責任，つまり権限は明確ではなく，それらの事項は，綱領においては具体性の無い一般論として述べられるにとどまっていた。このことが，マハッラの完全な自治組織としての発展を妨げていた。

7. 独立後

マハッラという用語が，ウズベク民族の歴史上初めて憲法上で使用されたのは，独立後であった。マハッラには，住民達による独自の自治的な機関として憲法上の地位が与えられ，法的な基盤が整えられた。国家憲法に基づき，1993 年 9 月 2 日，ウズベキスタン共和国最高会議第 8 会期において「市民自治諸機関について」の法律が採択された[26]。続いて，1999 年 4 月 14 日最高会議第 14 会期には，マハッラの活動をより改善する目的で，上記の「市民自治諸機関について」の法律の改訂版が制定された[27]。この法律により，マハッラ委員長や諸委員の権限は大幅に拡大された。

8. 結論

マハッラの歴史とその社会的な役割を概観したことで，以下の結論が導かれるだろう。まず，マハッラは長い歴史を有し，ウズベク国民の日々の社会生活や生活慣習を形成することに大きく貢献したことである。さらに，マハッラは，長い年月をかけて制度的に整備され，民族，社会的出自，宗教的信念の如何によらず国民をまとめあげることで，独自の社会組織として発展し，国民的に価値ある資産になったということである。

ウマロヴァ

26）Ўзбекистон овози. 1993 йил. 23 сентябрь.
27）Халк сўзи. 1991 йил. 22 апрель.

解説

ウマロヴァ氏の論考は，マハッラの起源を古代より始める遠大なものであるが，特にハン国時代以降の記述は，重厚な歴史文献や法令，新聞などの歴史資料に基づいた内容であり，全体を通して，現在の政策的利用に繋がるマハッラの歴史的経緯を明らかにするとともに，ウズベク国民にとってのマハッラの社会的意義を示している。資料的価値としては，例えば，ハン国時代のマハッラを扱った歴史文献は比較的に知られているものの[28]，マハッラの復興と政策的利用に向けた具体的な動きが，独立前のペレストロイカ期に既に開始されていたことが，当時の新聞記事を資料として仔細に紹介されている点などは，本稿の重要な貢献とみなされるだろう。

以下，上記のウマロヴァ氏の論考に見受けられるいくつかの特徴について指摘しつつ，独立後のウズベキスタンにおけるマハッラの社会的，学術的背景について若干の解説を加えたい。

まず，マハッラの起源について，アヴェスタ経典の記述やウズベキスタン領内の古代遺跡（「～テパ」として言及されている諸遺跡）の資料と関連付けて言及されている点について，読者はやや突飛な印象を受けるかもしれない。このような見解が提出される背景として，独立後のウズベキスタンにおいて公に進められた「歴史の見直し」の動きについて説明しておきたい。中央アジアにおいて，歴史の見直しの動きは既にペレストロイカ期から始まっていたが，独立後は，共産主義から決別した独立国家としての新たな理念やイデオロギーの創出にかかわる問題として，政治的にも重要事項となり，各国において国家主導による新しい国史の編纂が進んだ。その中で，ソヴィエト民族学の「エトノス理論」の概念やロジックが復活するようになる。その特徴としては，民族の基準としてとりわけ「領土性」を重視し，民族の起源を，その名称の由来にかかわりなく，その領域に居住していた最も古い人々に遡るという考え方を指摘できる。ウズベク民族の起源は，現在のウズベキスタンの領域に存在する考古学的な遺跡において居住していた定住民に遡るのであり，現在のウズベキスタンの領域内で行った事例は，民族の名称にかかわらず，全てウズベク民族の歴史となる。マハッラの起源を同国の遺跡の資料にまで遡るウマロヴァ氏の考え方も，このようなロジックに沿って生まれたものであることが伺える。逆説的であるが，同氏の論考から，マハッラの歴史が，ウズベキスタンにおいて，国家建設や統一国家としての理念にかかわる問題として，いかに重要なものとして取り扱われているのかを読み取ることができる。

また，上記の点にも関連するが，ウマロヴァ氏の論考は，ウズベキスタン領内のマハッラの記述に焦点がおかれているため，他国の共同体との比較や関連性に関する言及は見られない。しかし，マハッラに類似する共同体が，北アフリカや中東を含むイスラーム諸国において歴史的に広汎に見られ，都市生活の基本的な単位として存在してきた点は，これまでもイスラーム都市研究の中で示されてきた事実は指摘しておきたい[29]。ただし，マハッラを復興し，政策的に積極的に活用するという独立後のズベキスタンの政策が，現代において，同国のマハッラの独自性を際立たせていることも確かであろう。

最後に，独立後のマハッラ政策に関する記述が少なめであったので，若干補足しておきたい。99 年法令に基づき，マハッラ委員会は政府から様々な業務を公式に委託されるようになった。例えば，99 年法令 12 条には，マハッラ委員会の指導部の活動として以下のような多数の業務が挙げられている[30]。

市民集会の召集．マハッラ内の各種専門委員会の仕事の調整．代議士やホキミヤットの活動への協力．女性の擁護，支援．道徳的教育．若い世帯の教育．未登録の宗教団体の阻止．信仰の自由の監視．教育機関との協力．乳幼児のいる母親への

28）樋渡（2008）『慣習経済と市場開発』東京大学出版会，3 章 1 節，等。

29）羽田正・三浦徹編（1991）『イスラム都市研究－歴史と展望』東京大学出版会，等

30）樋渡（2008）『慣習経済と市場開発』東京大学出版会，p.80.

扶助金．老人の看護．就職の支援．小企業の設置，改革，解体．各種のボランティア活動の組織．農民，農園の支援．土地利用の管理．出入登録などの秩序維持のための各機関への協力．給水施設，学校などの衛生・エコロジー状態の管理．防火，家畜，建設などの監督．税金や公益事業への支払いの回収促進．自警団の組織．釈放された前科者の社会復帰の支援，など．

数あるマハッラ委員会の公的業務の中でも，生活困窮者への補助金給付業務は，開発政策の観点からも特筆すべき政策として挙げられる。1994年8月23日に「生活困窮家族の社会保護強化の措置に関する」大統領令が発令され，同年10月より生活困窮世帯への補助金給付がマハッラ委員会を介して実施されるようになった．住民の生活に密着したマハッラ委員会に，受給者のターゲティングに関する大幅な自由裁量を与えることによって，生活水準や住民のニーズについてマハッラの人的ネットワークが生かされることが期待されたのである．これは昨今，世界銀行等の国際機関が途上国や移行国で唱道する「コミュニティ主導型開発」の先駆け的な政策であっと捉えることができる。

以上にように，ウズベキスタンのマハッラは，伝統的な資源の政策的活用という点で，様々な潜在性を秘めた存在として注目されている。同時に，独立後の国家理念とも深く結び付くことで，ウズベキスタンにおいては社会的，政治的に重要な意義が与えられた。ウマロヴァ氏の論考は，マハッラ政策の歴史的経緯を紹介するばかりでなく，こうした政策の方向性が様々な分野にもたらす影響力を考えるうえでの格好の素材を与えてくれると思われる。マハッラのような伝統文化や国民のアイデンティティに深く関わる自治的共同体を，政策的に利用するということは，単にテクノクラティクな問題を超えて，広く社会的，政治的領域に大きな意味を持ち得るのである。このことは，政策研究にあたって誰もが認識しておくべき視座といえるのではなかろうか（樋渡）。